**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第８３回　（２０２２年１月２３日）**

**・勉強範囲：「第四章　在家の人への助言」４３頁下段 １４行目**

**・参考文献：『ナーラダ・バクティ・スートラ』日本ヴェーダーンタ協会　２０１５年**

**～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～**

前回に続いて、今回もバクティのさまざまな定義について説明します。

**バクティのさまざまな定義（続き：前回⑥の補足）**

前回、⑥ではパラマプレーマルパについて説明していました。続けます。

・愛の主体

普通の愛は、「私の子供」「私の家」など「私」にまつわるものに向かいます。愛の主体は私、つまり自分の身体や心と同化した「私」です。すなわち「私」であり、前回説明した（小文字で始まる）selfです。

本当のバクタの愛の主体は、サンスクリット語で「アハム」、ベンガル語で「アミン」、英語で「I」、日本語で「自我」と言われる「私」で、（大文字で始まる）Selfです。人の存在には「粗大なからだ」「精妙なからだ」「原因のからだ」（gloss body; subtle body; causal body）という３つのからだがありますが、そのうちの「原因のからだ」に当たります。

私という主体がなければ砂糖を味わうことができないように、原因のからだの私がなければ愛の甘さを味わうことはできません。その私によって、本当のギャーニはブラフマンとつながり、本当のバクタは神とつながるのです。

・愛の対象の数

普通の人の愛の対象はたくさんあり、神はその中の１つです。本当のバクタの愛の対象は神です。

・期待はない、愛のための愛

普通の人の愛には期待があります。たとえば親が子育てをするときに、「この子が成長して働くようになったら老後の面倒を見てもらおう」と期待を持つ可能性はあります。そして期待が現実と異なると、失望したり怒ったりします。

パラマプレーマルパは、愛のために神を愛している状態なので、神への期待は何もありません。解脱という霊的な願いさえ願うことはありません。

「解脱を本当に願うなら、私（神）は解脱をあげましょう。けれども本当のピュア・バクティ（純粋な愛）はあげたくない」という神の賛歌があります。ホーリー・マザーも「あなたは今生が最後の生です。私はいつでもムクティをあげましょう。でもピュア・バクティ、本当のバクティをあげることは稀です」とおっしゃっています。本当のバクタはいつでも神を見ていたいものです。でもそうしたら神は必ず彼の元に行かなければならず、バクティで縛られることになります。神ご自身も自由が欲しいのです。ですからピュア・バクティをあげることは非常に稀だとおっしゃるのです。ですがゴーピーたちにはそのピュア・バクティがありました。それがパラマプレーマルパです。

人はときどき会話の中で「I love you for the sake of love.」と言いますが、「愛のための愛」（love for the sake of love）は珍しいよりも珍しく、稀よりも稀で、簡単なものではありません。

・純粋

普通の愛で得られる楽しみや喜びには必ず心配、不安、恐れも混じっています。ですからその愛はいつ消えるかも分かりませんし、永続もしません。パラマプレーマルパは不純物の混じっていない純粋な愛です。

・無執着

普通の愛は執着という鎖で束縛します。そして束縛は自由を奪い、神への専心を妨げます。

マニ・マリック（シュリー・ラーマクリシュナの在家信者）の親戚の女性がシュリー・ラーマクリシュナの元に来て、瞑想のとき本当は神のことを考えていたいのに、神ではなく別の顔が浮かんでくるがどうしたらよいかと助言を求めました。彼女は弟の子を育てており、その子をとても愛していたのですが、瞑想時にその子の顔が浮かぶのでした。［👉『ラーマクリシュナの生涯　下巻』p309　2007年　日本ヴェーダーンタ協会出版］

神について考えたいのに執着したものに心が引きつけられてしまう。それが執着のです。もちろん各人の執着の対象はそれぞれですから、各人それぞれが自分の執着したものに束縛されています。ほかにサムスカーラやうぬぼれも束縛であり鎖です。束縛がある限り自由は得られません。

パラマプレーマルパはそれらを超越した神への純粋な愛です──スワーミー・ヴィヴェーカーナンダがそうでした。彼は兄弟弟子、自分の弟子、西洋の友人や弟子たち（たとえばメアリー・ヘイル、ジョセフィン・マクラウド、シスター・クリスティンなど）にたくさん手紙を書きましたが、その手紙を読むと、どれほど彼らを純粋な愛で愛していたかが分かります。また彼は、母国の人々だけでなく世界の人々を愛し、その愛には執着はありませんでした。彼が肉体をすてる直前にジョセフィン・マクラウドに宛てた手紙には、「私は誰も束縛しなかった。私は誰からも束縛されなかった」とあります。なぜならスワーミー・ヴィヴェーカーナンダは皆の中にシュリー・ラーマクリシュナという神を見ていたから（これはバクタの見方です）。皆の中にアートマンを見ていたから（これはギャーニの見方です）。つまり粗大的なからだと精妙なからだの関係ではなく、魂のレベルで愛していたのです。ですから執着がありませんでした。

・永遠無限

普通の愛の対象（人や物など）は有限で一時的です。霊的な愛の対象は神ですから永遠無限です。粗大なからだ（肉体）がなくなっても、精妙なからだと原因のからだは続きます。精妙なからだがなくなっても原因のからだは続きます──その意味で永遠です。

**パラマプレーマルパの実例**

パラマプレーマルパの実例を紹介します。パラマプレーマルパのイメージがしやすくなるでしょう。

・ゴーピーたち

ゴーピーたちは自分の身体、心、自我、魂、存在のすべてをシュリー・クリシュナに捧げていました。彼らにとって「自分のもの」など何もありませんでした。彼らは「クリシュナが楽しむと自分も楽しむ、クリシュナが苦しみ悲しむと自分も苦しみ悲しむ」という状態でした。彼らの人生の目的はクリシュナの喜びでした。

しかし普通の人の人生の目的は自分の楽しみではありませんか？　母親は子供を愛しますが、母親の人生の目的は子供が楽しむことではなく、子供を愛することで自分が楽しむことです。しかしゴーピーたちはそれと正反対に、自分が楽しむことを考えません。目的はクリシュナが楽しむことのみで、自分の存在がありません。もちろん自分の肉体はありますし、その肉体はクリシュナとは別々ですが、ゴーピーたちの中はクリシュナなのです。「枕にはいろいろな形があり枕カバーもいろいろだが、どの枕も中身は」というのと同じです。ゴーピーたちの肉体は別々に見えても、中身はクリシュナだけ──これがパラマプレーマルパの例です。

──ある時クリシュナは病気になり、アーユルヴェーダの治療をしても治りませんでした。そこで皆は、「クリシュナは神なのだから、ご自分の病の直し方も知っているはずだ」と考え、クリシュナにうかがってみることにしました。するとクリシュナは「信者たちの足のを私の頭にいただくと、私の病は治ります」と答えました。普通、聖者や僧侶など、神聖な方の足の塵を信者が有難がっていただくものです［脚注１］。しかしこの場合は信者の足の塵をクリシュナ神が欲しいとおっしゃっていて、信者の立場からするとそれは罪を犯すにも等しいことです。ですからクリシュナの妻ルクミニーも、偉大な信者ナーラダもウッダヴァもそれを拒否しました。ですがゴーピーたちだけは「どうぞ私の足の塵をとってください。それでクリシュナの病気が治るなら、私は罪を犯すとか地獄に行くなど全然気にしない」と言ったのです。彼らはただクリシュナに元気になって欲しいのでした。そのことで自分が災いを被っても全く構わなかったのでした──

普通の愛や普通の信者の愛と、ゴーピーたちの愛は何が違うか、これで分かりましたか？　パルマプレーマルパがなぜ稀で、特別か、分かりましたか？　ゴーピーたちの例を知ると、はっきりと、私たちの目的は自分の楽しみであると分かります。

・イエス

イエスの人生がいかに父なる神中心であったかは、聖書を読むと分かります。

・シュリー・ラーマクリシュナ

『シュリー・ラーマクリシュナの生涯』には、パルマプレーマルパのさらに詳しいことが書いてあります。シュリー・ラーマクリシュナの人生の中心はマザー・カーリー（カーリー女神）でした。シュリー・ラーマクリシュナは、何をするにもマザー・カーリーに相談して決めていました。バイラヴィ・ブラフマニーからタントラを教わることについても、トター・プリからヴェーダーンタを学ぶことについても、マザー・カーリーに相談して決めました。

トター・プリはニルビージャ・サマーディも経験した偉大な師でした。彼がシュリー・ラーマクリシュナに「ヴェーダーンタを教授したい」と言ったとき、シュリー・ラーマクリシュナはマザー・カーリーに相談してきますと言い、マザー・カーリーは「あなたにヴェーダーンタを教えるために、私がその方（トター・プリ）を連れてきた」と答えました。シュリー・ラーマクリシュナはいつもすべてをマザー・カーリーに相談し、マザー・カーリーにお任せし、マザー・カーリーに伝えていました。

ナレーンドラ（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのこと。この頃はまだ「形ある神」を信じていなかった）に、「あなたが言っているマザー・カーリーはあなたの心の想像の産物です」と言われたときには、ナレーンドラは七聖仙（サプタ・リシ）の化身で彼の言うことは正しいと考えていたので、シュリー・ラーマクリシュナは非常に混乱しました。そこでマザー・カーリーの元に行って説明を乞うと、ナレーンドラはこれから真理を受け入れるところなのだ、だから安心しなさいと知らされました。［👉『ラーマクリシュナの生涯　下巻』p377～378］

シュリー・ラーマクリシュナはマザー・カーリーに何でも話し、何でも伝え、愚痴も言いました。腕を脱臼したときには、「おお、ブラフママイー！　おお、母よ！　なぜこんなことをなさったのですか。私の腕はひどく痛んでいます」と文句を言いました。［👉『ラーマクリシュナの福音』👉p360　2014年　日本ヴェーダーンタ協会出版］

・ホーリー・マザー

ホーリー・マザーの人生の中心は、シュリー・ラーマクリシュナでした。アベダーナンダジー（シュリー・ラーマクリシュナの出家弟子のひとり）が作った賛歌の歌詞には、「ホーリー・マザーの人生は全てラーマクリシュナに向いています」「ホーリー・マザーはシュリー・ラーマクリシュナの名前を聞くのが好きでした」「シュリー・ラーマクリシュナの考えが自分の心の考えになりました」「シュリー・ラーマクリシュナ以外、ホーリー・マザーの存在は何もない」とあります。本当にそうです。同じ存在の、ひとつの姿がシュリー・ラーマクリシュナ、もうひとつの別の姿がホーリー・マザーなのですから。

・バガヴァッド・ギーター第9章１８節

*私は全ての最終目的であり、保護者であり、主であり、目撃者である。またすべての、避難所、友人でもある。さらに私は全ての起源であり、消滅であり、基礎であり、宝庫であり、そして不滅の種子でもある。*

求道者がパラマプレーマルパの状態になると、「すべては神」となります。

**バクティのさまざまな定義（続き：前回⑦の補足）**

⑦『ナーラダ・バクティ・スートラ』の第３節　［👉p31］

Amṛta-swarūpā ca.

アムリタ　スワルーパー　チャ

アムリタとは、ムリタ（＝死）に否定の接頭辞が付いて「不死」という意味で、その深い意味は（ネクター）です。甘露はそれを飲むと人が永遠になる飲み物で、普通の飲み物とは全く違います。［＊スワルーパとは自己の本性、自己の性質。swa自己の+rūpa形態（形態の微細な要素）］

この節の意味は「本当のバクティが培われた信者はになる」で、具体的には、

　・普通の愛は、増えたり減ったり消えたりして、グラフにするとカーブを描き続けるものです。ですが神への愛は、衰えるどころか増える一方、リミットなくどこまでも深くなる一方です。その類の愛が、求道者をムリタではなくアムリタにするのです。

　・普通の愛から得られる喜び楽しみも増えたり減ったり消えたりするものですが、神を愛する純粋な喜び楽しみは増す一方です。それで「アムリタ　スワルーパー　チャ」、甘露のようだと言っています。

　・思考の対象の性質は、それを考える者の性質になります。つまり神を愛し、神を思い、神を考え続けることで、神の性質のひとつである至福が自分の性質・本性になっていくのです。神を思うことで、至福という神の本性が自分の本性になり、その結果アムリタになります。

　・神を考え続けることで、自分の本性に気づき、それを悟り、永遠な至福の経験をします。なぜなら神は私たちの中に魂として存在していて（マクロレベルで神、ミクロレベルで魂と言いますが性質は同じもの）、私たちの魂の性質も至福だからです。それがアムリタ　スワルーパです。至福は原因のからだ（自我のこと。サンスクリット語でカーラナ・シャリーラと言います）と魂のレベルで体験できます。粗大なからだ（肉体）や精妙なからだのレベルでは体験できません。

**バクティのさまざまな定義**

⑧『ナーラダ・バクティ・スートラ』の第４節　［👉p35］

Yallabdhvā pumān siddho bhavati, amṛto-bhavati, tṛpto bhavati.

ヤラブドヴァー　プマーン　シッドー　バヴァティ　アムリトー　バヴァティ　トリプトー　バヴァティ

翻訳：「それを得ると、信者の目標は満たされ、不滅になり、そして完全に満足する」

この節には３つのポイントがあります。「シッドー　バヴァティ」「アムリトー　バヴァティ」「トリプトー　バヴァティ」です。

・シッドー　バヴァティ

プマーンは「信者たち」、シッドー　バヴァティは「目的を満たす」です。普通の人の人生の目的は金銭的満足や家族を持つなどですが、人はその願いを満たしたら別の願いを満たそうとするものです。願いを満たしたものの、最高の満足を得られなかったからです。それで次の人生で願いを満たすために輪廻転生するのですが、神への愛によって、「シッドー　バヴァティ」、すべての目的が満たされます。最高のもの（すなわち神）、最も偉大なもの（すなわち神）を得たので、それよりも小さいものや一時的なものはいらなくなったのです。バガヴァッド・ギーター第６章の２２節に「これに勝るものはないという至高の境地に達すれば、」とありますが、それと同じことです。

・アムリトー　バヴァティ

これは先ほど説明した第3節と同じです。

・トリプトー　バヴァティ

1つの願いが満たされると、バターに火が注がれた状況となって、願いがさらに大きな欲望と化します。しかし神への愛によって、願い・欲望は生じなくなります（もちろんさらに大きくなる可能性もなくなります）。

第４節ではバクティとは、以上のような結果を得る種類の神への愛だ、と定義しています。つまり私たちの愛が本当の神への愛であれば、私たちは「シッドー　バヴァティ」「アムリトー　バヴァティ」「トリプトー　バヴァティ」になるのです。すべての目的は満たされ、すべての願いは満たされ、不死になり、至福があらわれます。

［脚注１］インドには「足の塵をいただく」という考えがあります。ベルルマトの土地を買って僧院を建てるとき、ホーリー・マザーはその土地に来て欲しいと請われて行きました。そしてホーリー・マザーの足が触った塵やほこりはすべて神聖なものになったのです。その塵やほこりは壺に入れられ、今もベルルマトの祭壇のある場所に置かれてあります。私はベルルマトへ行くと必ずその祭壇に行きプラナームします。他のお坊さんも今でもそれを礼拝しています。ホーリー・マザーの足の塵ですから、とてもとてもホーリーですね。ホーリー・マザーのdust of Holly Mother’s feet.

**（賛歌奉献）**（映像データの１：４４：２０頃）

「ヤニロヘロピヤチョ　モロティートーレー　ラーマクリシュナ　トゥマイ　プラナモ　トレ」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上